

News Letter

みなさんは、北海道旅行といえば何を思い浮かべますか？

スキーや時計台やラベンダー畑でしょうか？ それとも、カニやイクラやトウモロコシでしょうか？ 生きものに興味のある方なら、ヒグマやタンチョウ、オジロワシなどを思い浮かべるかもしれません。

私の場合、真っ先に思い浮かべるのはフェリーです。正確に言うと、フェリーから観察できる海鳥です。海鳥とは、その名の通り海にすむ鳥です。日本は海に囲まれ、その海は亜寒帯（北海道）から亜熱帯（沖縄）にまで広がるため、およそ 100 種もの海鳥が生息しています。海鳥はカモメの仲間を除くと、陸上から見るのがほとんどできません。彼らを効率良く見るためには船に乗る必要があります、なかでも北海道へ渡るフェリーは、多くの海鳥が観察できることで

（一部マニアの間で）有名です。

私は「珍しい鳥を見るためには、金も時間も惜しまない病」にかかっており、仕事でもプライベートでも、ほとんど 365 日鳥を見続けています。長い休みが取れたときなどは、北海道までバードウォッチングに行ったりするのですが、フェリーで行くと、北海道でオジロワシやタンチョウなどが見られるうえに、往復の海上で海鳥まで見られ、とてもお得なのです。しかし、何度も北海道に通っていると、オジロワシやタンチョウなどは見慣れてきます。一方、海鳥の中には広い太平洋の彼方からごく稀にしか飛来してこない種もいるため、何度フェリーに乗っても見ることができない鳥も数多くいます。

そうすると、だんだん「北海道の鳥を見に行くためにフェリーに乗る」というよりも「海鳥を見るために北海道行きのフェリーに乗る」度合いが強くなっていきます。そのため、回数を重ねるごとに北海道での滞在時間が短くなり、最近では北海道にフェリーで行っても、そのまま同じフェリーでトンボ返しし、滞在時間は数時間ということも多くなりました。

私は最近、関東の大学を出た後 15 年ほど北海道で働いていた女性と結婚したのですが、彼女に言わせると「北海道に行った回数は、私よりあなたの方が多い」そうです。もっとも、そのうち半分くらいはトンボ返しなのですが・・・

（東北支社 自然環境研究室
湯浅 健）



クロガモ



コオリガモ



ウミウ

巻頭エッセイ

北海道へと 旅する理由は・・・

乱舞するオオミズナギドリ

目次

エッセイ	北海道へと旅する理由（ワケ）は・・・	1
業務紹介	自然の恵みを受け続けることができる 社会の実現を目指して	2
業務紹介	鳥獣被害対策の助っ人参上！ 野生生物管理事業部のご紹介	4

連載漫画	びっくり！目からウロ子ちゃん	6
Information	ちいかん Presence の広場	7
	祝・復刊 プレゼントキャンペーン実施中！	
ある日の フィールドノートから	遙かなる幽谷の宝石	8

自然の恵みを 受け続けることができる 社会の実現を目指して

お雑煮と柏餅に
秘められた
生物多様性

大阪支社 生物多様性推進室長 石山 麻子

今年のお正月、皆さんは お雑煮を召し上がりましたか？

東京出身で大阪在住。元旦は東京風澄まし汁、2日に関西風白みそのお雑煮をいただいている私には、全国のお雑煮事情がとても気になります。初めてお会いする方には「どこの出身で、どんなお雑煮を食べるの?? ダシは? 具材は? でオイシイの?…」と、インタビューをしてしまいます。中でも一番驚愕したのは、香川県の白味噌仕立ての「あん餅雑煮」でしょうか。残念ながらまだ実食には至り

ませんが、とても気になっています。

お正月にはつきもののお雑煮は、とても地方色が強い食べ物です。共通しているのは材料にお餅が入っていることだけで、そのお餅でさえ丸か四角か、焼くか、焼かないかで4通りあります。味付けも澄まし、味噌、珍しいところではしるこ仕立て、具材にいたっては多すぎて書ききれませんが、その組み合わせるや大変な数で、お味も計り知れません。

日本は過去 50 年程の間に、人も情報も激しく行き交う時代になりました。ですが、その土地ならではの食

材で作られたお雑煮は、地域らしさを失わずに引き継がれています。

これは、豊作や家内安全を祈り感謝する共通の文化が存在する一方で、地域によって自然環境が大きく異なるため、自然の恵みを活かす様々な知恵と経験によって「食や味覚の多様性」が生まれ、大切に育まれてきたからでしょう。

私たち日本人にとってお雑煮はハレの日の食べ物です。このため、お正月に故郷へ帰り、家族で地域の食事をいただく習慣が、現代に受け継がれているのでしょうか。



『農林水産省 食文化学習ツール「私たちの食文化ってどんなもの？」

<http://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/syokuiku/pdf/sry.pdf>

(原図：奥村彪夫、参考：「おくむらあやおふるさとの伝承料理⑩ わくわくお正月とおもち」(農山漁村文化協会 2006 年))』を加工して作成

右上下：「コウモリが飛ぶ！みどり豊かなさっぽろのまち
～大人のための生物多様性講座～」
座学ののち、ビル群に囲まれた北海道大学植物園
のまわりを飛ぶコウモリを観察しました。

下：地域連携魅力向上セミナー「特産物の開発・
販売・広報を学ぶ」（滋賀県）
地域の資源を活かした様々な事業を紹介し、交流す
るイベントを開催しました。

サルトリイバラにはさまれた柏餅



お次は柏餅のお話です。

柏餅といえば、その名のとおりカシワの葉にくるまれたものを思い浮かべる方が多いと思いますが、以前広島県の山あいの道の駅で売られていた柏餅は、サルトリイバラの葉にはさまれたものでした。その時は、なぜカシワの葉ではないのに柏餅なのだろうととても不思議に思ったものです。

これについて服部らは柏餅について利用植物、葉の利用形態等を調べ、結果を下記のように述べています。

- ・かしわもちの利用植物は17種類
サルトリイバラが最も多く、他にカシワ、ホオノキ、ミヨウガ、ナラガシワなどであった。サルトリイバラの利用は西日本に多い。
- ・カシワ以外の利用植物は各々の地域の里山景観を構成する植生の代表的構成種で、きわめて身近な植物であった。
- ・カシワの利用は17世紀に江戸で始まったがその拡大は20世紀初頭も関東周辺で止まっていた。その要因として里山・里山の植物でないカシワの入手が困難なためと考えられた。（関東以西では里山林のカシワの出現は稀であった）

出典：服部保・南山典子・澤田佳宏・黒田有寿茂（2007）「かしわもちとちまきを包む植物に関する植生学的研究」 人と自然（17）：1-11

このように、柏餅に利用される植物は身近にあるものが使われてきたことがわかります。

お雑煮や柏餅を例にしましたが、人々はいにしえより身近にあるもの（＝自然の恵み）を利用し続けてきました。そしてそれが現代も地域の独特の文化や個性として引き継がれ、現代に生きる私たちの存在と強く結びついているといえるでしょう。

きっかけを支援します！ 取り組みをつなげます！

この数年来、ちいかんは、「将来にわたっても自然の恵みを受け続けることができる社会の実現」を目指し、生物多様性を推進する事業を展開しています。

その際ベースとしているのは、まずは個人、団体に関わらず、地域社会がその一歩を踏み出すきっかけづくりの支援です。「自然や生物多様性は大事」という考え方や知識を単にレクチャーするのではなく、興味や行動につながるような「生きものたちの暮らしとの橋渡し企画」をご提案しています。

例えば、昨年企画した「札幌市主催・コウモリが飛ぶ！みどり豊かなさっぽろのまち～大人のための生物多様性講座～」は、平日の夕刻に実施しました。仕事帰りのビジネスパーソンも気軽に参加でき、まちなかに息づく意外と豊かな生態系を身近に感じていただき、盛況を博しました。

また、東京都千代田区では、生物多様性地域戦略の一環として「区民参加型モニタリング調査」を実施。東京の都心部であるにもかかわらず、皇居吹上御苑を含めなくても、既存情報と自然環境調査により896種の植物の生育、1,244種の動物の生息が確認されるなど、大きな注目を集めました。

もうひとつのベースは、地域の恵みと人をつなげる、いわゆる資源を活かした地域の活性化の支援です。

地域の食べものや、遊び、昔からある生産物を知り、作る。それぞれの地域でしか作られてこなかったものやその技術は、手間がかかるため敬遠され、大量生産、大量消費時代の中でどんどん失われてきています。私たちはそれらを現代に引き継ぐきっかけづくりをしたいと思います。

この例としましては『特産物の開発・販売・広報を学ぶセミナー』（滋賀県主催 平成27年2月開催）の事務局支援が挙げられます。このセミナーでは、地域の資源を活かした特産品づくりなど、農村の活性化事業の紹介・交流を通じて地域の活性化をはかるお手伝いをしました。

◇ ◇ ◇

「学ぶ・知る」「創る」「広げる・つながる」をテーマとして、ちいかんは長年培ってきた「地域に根付いた生きものの特化型専門家集団」の強みを活かし、これからも生物多様性の保全に取り組むすべての皆様に支援していきたくと考えています。

鳥獣被害対策の

野生生物
管理事業部の
ご紹介

助っ人 参上!

野生生物管理事業部長
宮畑 貴之

■ 広がり続ける鳥獣被害の規模

イノシシが畑を荒らしたり、シカが木の芽や樹皮を食害したりする野生鳥獣による被害は、年を追うごとに拡大しています。その被害額は、年間約 230 億円（平成 24 年農林水産省）林業被害面積は約 8,900ha（平成 25 年林野庁）にも達し、我が国の農林業やそれらを営む方々の生活環境にも深刻な影響を及ぼしています。このままでは、国民全体の暮らしや食生活にも深刻な影響を与える事態になりかねません。

■ 野生生物との共存の歴史

私たち人間と野生鳥獣は、有史以前より共存を続けてきました。

おとぎばなしでは、人々と生きものの暮らしが生き生きと描かれていますし、こっそり台所に忍び込んで野菜を盗むシーンなど「悪さ」をしているエピソードも数多く出てきます。

史実としては、江戸時代の鳥獣被害対策「しし垣」が有名です。万里の長城さながら長さ 10km にわたって石や土を積んだ大規模な防護壁で集落を囲いイノシシの侵入を防いだという記録が残っていて、先人たちの苦労が偲ばれます。まさに野生動物との知恵比べですが、それも含めて「共存の歴史」と言えるでしょう。

ところが、近年（昭和特に戦後）地球温暖化、自然環境の変化、地方の過疎化や高齢化などさまざまな問題が複合的に重なった結果、野生鳥獣の被害は、待ったなしの大問題になっているのです。

■ なんとかしなければ…

私たちは、長年にわたり、業務をつうじてイノシシによる農作物被害の惨状やシカによる植生被害、オオクチバスやアライグマによる生態系への影響などを目の当たりにしてきています。なんとかしなければ… そのような思いで、2014 年度新たに野生生物管理事業部を立ち上げました。



イノシシによって掘り返されたミカン畑



イノシシが耕作放棄地を掘り返した跡



行政、猟友会、農家の方々、コンサル等
みんなで対策の作戦会議



持続可能な対策の推進

鳥獣被害対策をコンサルティングする

国や地方自治体、地域、農家等が、それぞれの立場に応じた施策を推進するために一番重要なのは、「情報の共有」です。被害状況の調査結果や解析結果（今後の予測）、地域単位の取り組みの進捗、様々な課題等の情報をリアルタイムに共有することによって、確実性の高い目標を決めて効果の得やすい計画を立てることができます。

効果的な計画を推し進めるには、体制づくりや継続的な予算の確保なども重要なポイントです。

対象地域の実情を的確に把握し、加害個体や増えすぎた個体の捕獲を行うとともに、将来を見通し、長期的に持続可能な道筋を検討します。

事例－農林業のまち「和歌山県日高川町」

和歌山県日高川町は、温暖な気候で古くから農林業を基幹産業として発展した町です。全国でも人気が高い温州みかんや紀州備長炭の生産量日本一で有名ですが、それだけにサルやイノシシの農業被害の悩みは深刻でした。そこで、私たちは地域ぐるみで獣害に立ち向かうため、以下のような支援をしました。

- ・将来にわたって継続できる体制づくり
（地元の農家の皆様を中心に、役場、猟友会などが連携するメンバーに呼びかけ）
- ・地元農家メンバーによるサルのテレメトリー調査
- ・獣害マップの作成・更新と、それをもとにした捕獲及び被害対策の検討
- ・サル用防護柵の設置と維持管理、サルの追い払い指導
- ・各種わなを用いたサル、イノシシ、シカの捕獲推進のための講習会の実施
- ・捕獲分担の調整、獣害対策のための月1回の定例会の実施

こうした取り組みを3年間続けたことで、地元農家を主体とした獣害対策組織ができ、地域ぐるみの獣害対策が進みはじまりました。

日高川町鳥獣被害防止計画

http://www.town.hidakagawa.lg.jp/town/tt_sangyou/cyoujyuugaitaisaku/boushikeikaku.html



防護柵設置作業

野生生物管理事業部が担うこと

日高川町の事例のように、集落単位、地域単位での様々な対策は全国各地で取り組みが行われています。地域連携がうまくいっている所もありますが、多くの地域で高齢化や担い手不足の課題があり、また地域ごとに異なる問題を抱えているのが現状です。

しかし、地域の産業と地域住民を守っていくには、利害をともにするステークホルダー（行政をはじめ、農業関連団体、猟友会、地域おこし隊、個人等）の連携（一致団結）と、体制構築がカギであるのは確かなことです。立場が異なっても「目的」が同じであれば、連携すれば大きな推進力がうまれます。

野生生物管理事業部は、日本全国で鳥獣被害に悩んでいる地域の皆様に、その地域にふさわしい連携のかたち、解決の道筋をつくるお手伝いをしていきたいと考えています。

びっくりの目からウロ子ちゃん

目からウロ子ちゃん
知ったかバリバリ博士



絵：飯塚 幸

YS7アンの皆様、たいへん失礼しました。

ちいかん Presenceの広場

ニュースレター編集部

目

指せ業界ナンバーワン！
生きもの技術向上推進の取り組み

「生きもの技術のスペシャリスト集団」としてお客様に最高のサービスを提供し続けるため、ちいかんは、設立当初より社員の研究開発活動を支援してきました。学会、研究団体、NPO 等での発表や出版物の執筆活動等を称える社内表彰制度を設け、社員の技術力の研鑽を奨励しています。2014 年は、過去最高の 31 件が表彰されました。



各支社表彰風景の一部です。

エ

エコプロダクツ研究所オープン！
地球にやさしい暮らしをご提案

2014 年秋『エコプロダクツ研究所』をオープンしました。

エコプロダクツ研究所では、環境に優しい製品の紹介、その使い方やアドバイスを中心にしたお役立ち情報をブログ形式で発信しています。私たち一人ひとりが暮らしの中でできることをご提案していきます。ただ今、家庭用生ごみ処理ロボット「NEW サム」飼育日記更新中！

ぜひご覧ください。

<http://ecopro-lab.com>

見に来てネ！

「NEW サム」イメージキャラクター
サム君



ち

いかん公式 WEB サイト
ただいま絶賛更新中！

昨年全面リニューアルしたちいかん WEB サイト

<http://www.chiikan.co.jp>

注目の新企画「ちいかんコラム」コーナーでは、生きものの専門家ならではのオモシロお役立ち情報を更新中。ちいかん社員の意外な素顔にも出会えるかも！！可愛い生きものたちのイラストとともに、皆様のご訪問、お待ちしております。



ちいかんコラム更新中

新

装開店！ニュースレター復刊記念
プレゼントキャンペーン実施中！

2015 年春、約 3 年間休刊していたニュースレターを復刊しました。

生きものや自然、それにまつわる社会の出来事の情報などなど、ちいかん社員渾身の記事を掲載。新キャラクター「目からウロ子ちゃん」が登場する連載漫画もスタートします。ちいかん社員のメッセージを皆様のお手元に届けたい！そんな気持ちでこれからも紙面づくりに励みます。今なら復刊記念プレゼント実施中。期間中、毎月抽選で 10 名様にオリジナルマグネットをプレゼント。詳細・お申し込みは WEB で！

<http://www.chiikan.co.jp>



ちいかんオリジナルマグネット
※デザイン等の仕様は、実際の賞品と異なる場合があります。

側面の白い斑点は、多くのイワナ
亜種の特徴（下の写真はアメマス
Salvelinus leucomaenis leucomaenis）



朱色の斑点が特徴のヤマトイワナ
(*Salvelinus leucomaenis japonicus*)

従来ヤマトイワナが生息していた
はずの河川に棲む「白斑」イワナ



私が北海道から東京に転勤する
ことが決まったのは、2011年の春の
ことでした。転勤に際して、本州で
見たい生きものがいくつも候補に挙
がりました。その一つに、中部地方・
紀伊半島に生息するヤマトイワナと
いう魚がいます。

日本のイワナは英語で「Whitespotted
charr(白い斑点のイワナ)」と呼ばれ、多
くの亜種は体側の白い水玉模様が特徴で
すが、ヤマトイワナは他の亜種と違い白
い斑点が極端に少なく、朱色の斑点が体
側にみられるのが特徴とされています。

ある夏の日、ヤマトイワナの分布地を
訪ねて、人里離れた山奥へ足を延ばしま
した。朝から車を走らせること5時間、
観察に良さそうな川を見つけました。

はやる気持ちを抑えつつドライスーツ
に着替え、川に潜り岩に身を隠しながら
覗き込むと…見えました！イワナの姿が。

ただしそこで「え?!」と思うことがあ
りました。

そのイワナ、体側には綺麗な白斑が…。
どうやら「ヤマト」ではありません。

何故ここに白斑を持つイワナがいたの
でしょうか。実は、イワナは釣りの対象
魚として人気が高いほか、食用としての
価値も高く、古くから増殖のために 養殖

ある日のフィールド・ノートから

遙かなる幽谷の宝石

魚を放流するといった努力がなされてき
ました。しかし、地域の個体群といった
考え方が定着してきたのは近年のことで
あり、ヤマトイワナの生息域に、養殖が
より容易な別亜種のニッコウイワナやア
メマスが放流される、といった経緯がし
ばしばあった（ある）ようです。イワナ
は亜種間で簡単に交雑し子孫を残すこと
から、眼前のこのイワナもヤマトイワナ
と放流された他亜種との間に生まれた
子孫である可能性は十分に考えられます。

この状況を受け、私は「生粋」の個体
に出会うため更に上流を目指しました。
上流にはおそらく砂防ダムがあるからで
す。砂防ダムは、河川を上下流に移動す
る魚にとっては移動の妨げになる施設で
すが、下流側で行われた放流から上流側
の在来個体を守るという予期せぬ効果も
あります。案の定、10分ほど進んだ先に、
高さ約5mの砂防ダムが私の眼の前に出
現しました。

私は「このダムを越えればきっと…」

という期待を胸に、暑い中ドライ
スーツという出で立ちで、さながら
ダメなスパイダーマンの如く急な斜
面を越えて上流へと移動しました。

期待を新たに覗いた川の中には…
いました！心なしか白斑が少なく
朱色が濃いイワナが。残念ながら、

この個体も生粋のヤマトイワナではなさ
そうです。その先で砂防ダムをもう1つ
越えてみましたが、状況に変化はみられ
ず、体力的・精神的・時間的に限界を迎
えた私は、ヤマトイワナへの険しい道の
りを肌で感じたと同時に、本州のイワナ
が晒されている危機的状况を思い知らさ
れたのでした。

帰路に就く中で、生きものたちが極力
本来の環境でいきいきと暮らし、人がそ
の豊かな恵みをいつまでも受け続けられ
るようになるためには、生きものに関わ
る仕事をしている私たちが、このような
現実と生物多様性保全の大切さについて、
多くの方々に伝えていかなくてはならな
いのだと、思いを新たにしたのでした。

因みに、その年の秋、同水系の別の沢
を訪れた私は、山道を行くこと3時間、
ようやく「本物」に巡り逢うことができ
ました。

（東京支社 自然環境研究室 後藤 健一）

News Letter No. 37 2015年4月

【発行】……………株式会社地域環境計画

● 発行人……………高塚 敏

● 編集……………中山香代子・釣谷佳子・岡崎康代・福岡由佳

素朴な疑問やご感想などお寄せください。お待ちしております。

E-mail : nl-info@chiikan.co.jp

札幌は暖冬で、雪解けのペースがとても早いです。やけに喉がイガイガ、肌がチクチクすると思ったら、例年より半月位早く、2月末からハンノキ花粉が飛散をしているようです。しかし、こんなに暖かいのなら明日から自転車を出そう！と思った矢先にドカ雪が…通勤時間短縮と運動不足解消の快適生活は、しばしの間おあずけとなりました。同時に花粉との共生（闘い?）も、数日間は持ち越しです。（釣谷佳子）

〒154-0015

東京都世田谷区桜新町 2-22-3 NDSビル

■ 本社・東京支社・野生生物管理事業部 TEL : 03-5450-3700

■ 北海道支社 TEL : 011-717-8001

■ 東北支社 TEL : 022-772-6651

■ 名古屋支社 TEL : 052-760-2822

■ 大阪支社 TEL : 072-684-3182

■ 九州支社 TEL : 092-833-5270

■ 鳥獣被害対策.com URL http://www.choujuhigai.com

■ エコプロダクツ研究所 URL http://ecopro-lab.com

株式会社
**地域環境
計画**
生きものと共生する
地域づくり **ちいかん**